



1号石棺

2号石棺

○史跡快天山古墳は、古墳時代前期後半（4世紀中頃）に築かれた前方後円墳です。丸亀平野の東側に南北に長くそびえる横山山塊の南端の尾根上に、前方部を北に向けて築造されており、全長ほぼ100m（98.8m）という規模は同時代の古墳としては四国最大級の古墳です。

昭和25年に1回目の発掘調査が行われ、3基の刳抜式石棺が見つかりました。その際、多くの副葬品も見つかっています。このときの調査は石棺を中心に行われたようで、昭和26年には埋戻されています。

○令和3年度から、快天山古墳の石棺の保存状態や埋葬施設について確認し、保存整備に必要な資料を得るための発掘調査を行っております。今年度は、1号石棺を中心に発掘調査を進めており、石棺や埋葬施設の構造について確認しています。

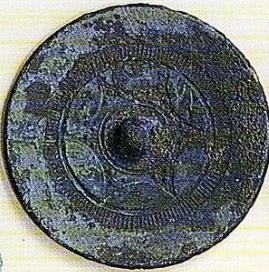


快天山古墳全景（北から）

快天山古墳からは丸亀平野や羽床盆地を見ることができ、古墳の大きさからこの地域一帯に権力を持っていた人物が葬られていると考えられています。



獣文縁方格規矩四神鏡



内行花文鏡



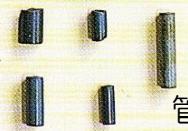
内行花文鏡



石釦



石釦



管玉

昭和25年発掘調査で出土した副葬品（一部） ※展示していません



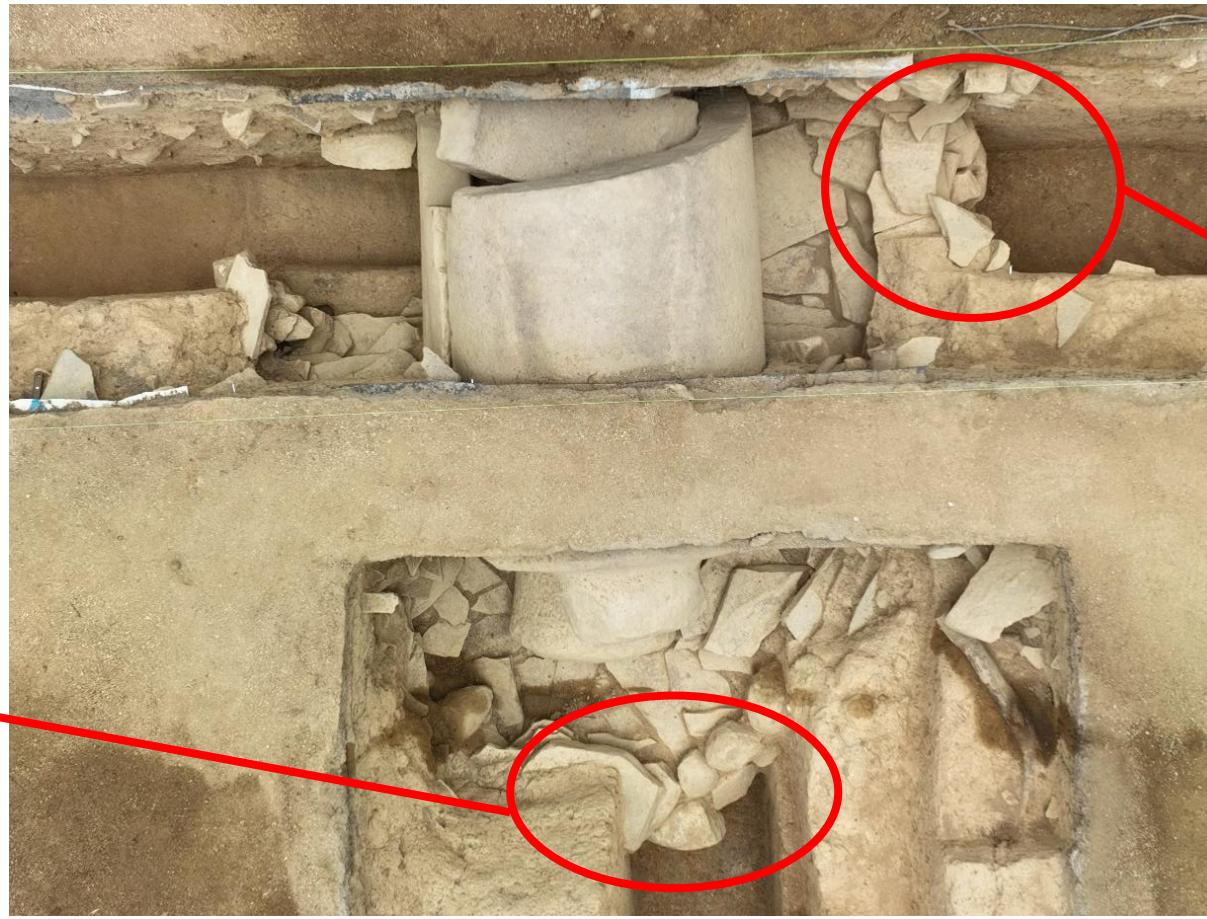
快天山古墳に埋められている3基の石棺は、高松市の鷲の山産の角閃安山岩です。形状から、刳抜式割竹形石棺と呼ばれています。

1号石棺は昭和25年の発掘調査以前に盗掘を受けており、石棺のふたが大きく割れています。ふたと身（下側）の両端には縄掛突起と呼ばれる突起がついています。

昭和25年発掘調査時の1号石棺（北から）



石積みの背面に詰められた円れき（石棺西側）



1号石棺（上から）



石積みの背面に詰められた円れき（石棺東側）

今回の発掘調査では、1号石棺の周りの埋葬施設が想定以上に良好に残されていることが分かりました。また、石棺にぴったりと板石をくっつけて積み重ねている様子や、板石の背面に円れきを重ねて配置している状態がよくわかります。さらに、石積みの上には粘土が厚さ10～15cmあり、東西に約1m、南側に約80cmの範囲に敷かれていることが分かりました。このような状況から、石棺の上面は粘土で密閉されていた可能性が考えられます。

1号石棺の埋葬施設では、石棺の下には厚さ5～10cmの細かい盛土が固く締め固められており斜めに板石が入っていることが分かりました。石棺が沈まないよう念入りに盛土をしたものと考えられます。

また、1号石棺と2号石棺の間に堆積する土の状況を観察すると、1号石棺を埋めている土が2号石棺を埋めている土と同じ土であることから、2基の石棺が同時に埋められていることが明らかになりました。2基の石棺は盛土を水平にした上に置かれ、石積みをつくりながら盛土をさらに重ね、粘土で覆われた構造をしていたと考えられます。このような事例は珍しく、今後さらに詳しく確認していく予定です。



1号石棺と石積みの状況（南東から）

今年度の発掘調査では、1号石棺やその埋葬施設の様子を明らかにすることができました。特に、2基の石棺が同時に埋められていたこと、石積みと粘土をもちいた埋葬施設が確認できたことは重要な発見となりました。この成果は学術的にも貴重なもので、今後の研究や調査を加えて史跡快天山古墳の保存・整備の資料などとして活用いたします。

